第３章　総括

第１節　中世の古墓について

今回の調査では、２基の塚の存在が明らかになった。塚１の形状は方形で、規模は最大残存長6.2ｍ、最大残存幅5.5ｍ、高さ1.9ｍを測る。北・西端は築造時の端が判明したが、南端は近世以降の五輪塔集積によって改変され、東側も近世以降には加工段で削られていた。盛土上に浅い楕円形の土坑を、盛土下に方形の塚１下土坑と平坦面を伴っている。もう１基の塚２の形状も方形であると思われ、最大残存長4.5ｍ、最大残存幅1.6ｍ、高さ0.7ｍである。集石を伴うが、詳細は不明である。

塚１に直接伴う遺物が出土していないことから、築造時期を判断するのは困難である。そこで本節では、築造及びその後の利用の変遷を復元し、近隣の類例と比較対照することで、塚１の性格やおおよその築造時期を考えてみたい。

まず、調査により明らかになった塚１の築造及びその後の利用の変遷を示す。

１．塚１下土坑と平坦面を作成する（第９図１参照）。平坦面は南北４ｍ以上、東西は1.5ｍで、東側に高く地山を削り残し、西方面に開いているように見える。土坑の位置は、平坦面の中央で東側下端と重なる所であり、平坦面の中央東奥を意識している。塚１下土坑からは遺物が出土せず、また土層観察で棺痕跡は認識できなかった。土層の中間に黒ボク由来と思われる黒色土（第８図第35層）が水性堆積であり流れ込みと判断できることから、一時期この層より上部が地上に露出し、土坑に関し何らかの行動をした後に再び埋めるという行為があった可能性が考えられる。第35層の上には、地山由来の明黄褐色土が混ざる褐灰色土が土坑内全体に堆積する。

２．黒褐色土を主体とする盛土を施し、方形の墳丘を構築する（第９図２参照）。盛土は塚１下土坑埋土上層の褐灰色土と明確に区別できる。黒ボク由来の黒色・黒褐色土と、若干淡い色調のにぶい黄褐色・灰黄褐色土を交互に重ねている。

続いて、塚上部に土坑を掘削する。この土坑は宝篋印塔Ｓ１～４設置のため掘削されたと想定されるが、確証はない。ここまでの過程で塚１がいったん完成する。

３．東側に加工段が掘削される（第９図３参照）。加工段には台石と思われる石が配置され、五輪塔の各部材が散乱していたため五輪塔が建てられた可能性がある。五輪塔の個体数は東集積１で２～５基、東集積２で３～７基と数えられる。しかし、地輪が原位置を保った状態で確認できなかったので、出土した部材がこの場所で組み合わされて建っていたことを示す根拠はない。

４．さらに、南集積２・３と重なる位置に18世紀末～19世紀になって竿墓群が構築される。南側へは平坦面が広がるため、小規模の堂宇等の建築物があったことも考えられるが、推測の域を出ない。その後、南集積１～３で現代に至るまで石塔集積が行われる。

以上から塚１の特徴を簡単にまとめると、(1)方形の墳丘を持つ塚墓である、(2)盛土下に土葬墓かと思われる土坑が１基あるという点で、塚周辺に石塔を伴う可能性が高いことも言えるだろう。

鳥取・岡山県の中世墓をまとめた中森祥氏によると[1]、中世前期、岡山県内の津寺遺跡群、高塚遺

跡、久田原遺跡などでは屋敷墓が見られる。集団墓は室町～近世初頭の真庭市福田A遺跡のような短期間の造営と吉備中央町大村中世墓群のような長期間の造営がある。大村中世墓群では、火葬（集石・蔵骨器）は13世紀中葉から始まり14世紀初頭まで増加、土葬は14世紀後半から15世紀に増加、以降主流になっている。全体として中世後半までは火葬墓が多数だが近世初頭は土葬墓へ変わる。山陰では石積基壇と火葬骨と石造物が伴う傾向が強く、14世紀後半からセット関係があり、16世紀に消失する。岡山県内で石積基壇は少ない。塚墓は出雲東部から伯耆・因幡の山陰側が中心で美作でも見られる、といった流れである。

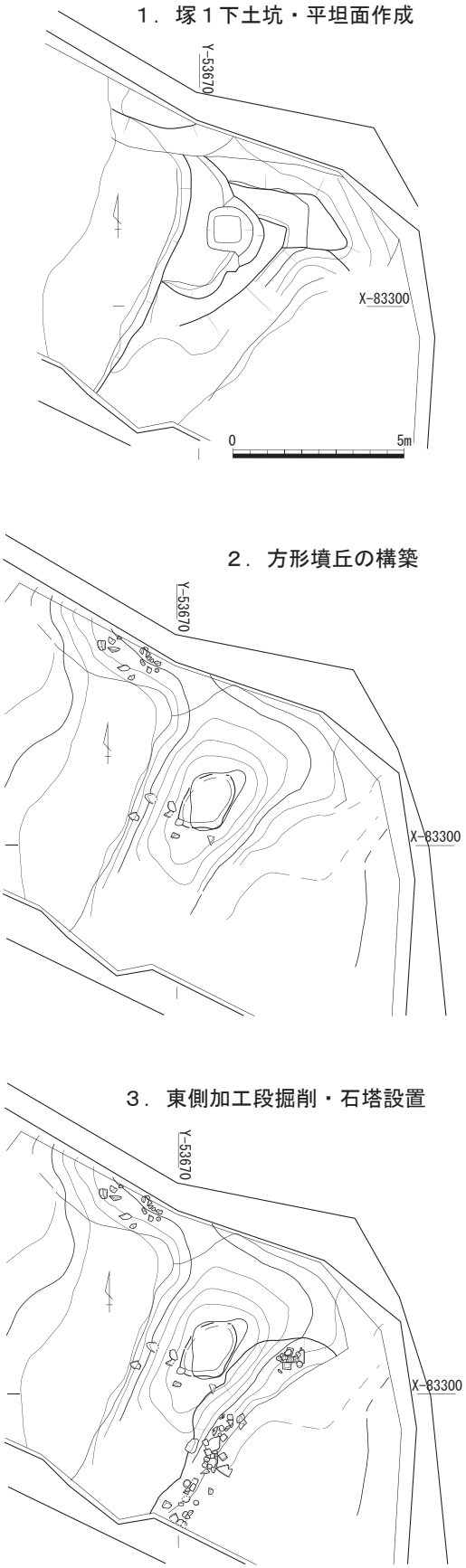
初和古墓は塚墓に当たるため、その類例と比較対照を試みる。

美作での例として、小池谷遺跡の塚[2]、茂平古墓[3]などがある。

小池谷遺跡の塚は全長9.8ｍ、上段幅6.2ｍ、下段幅4.7ｍの方形２段で盛土を施す塚墓で、上段に６か所に分かれる集石を伴う。上段の中央付近に最大の埋葬施設があり、炭・焼骨片とともに円筒形の瓦質土器と開元通宝が出土した。集石の間に蔵骨器や骨片、集石の下に火葬骨を収めた埋葬施設があり、埋葬施設の中には備前焼の蔵骨器を収めたものがある。備前焼の蔵骨器から15世紀､室町時代にあたる。塚築造の発端として中央に土坑を掘削している点は初和古墓と類似するが、五輪塔が非常に少なく、蔵骨器が存在する点が異なる。

茂平古墓は１辺約12ｍ、幅２ｍの方形の周溝の内側に高さ約１ｍの墳丘を構築し、墳丘頂部近くに方形の石列が巡る。塚中央に土坑を掘削し備前焼の甕が１基埋設され､時期は鎌倉末～室町時代である。石塔類が見られないなど初和古墓と異なる点が多い。

山陰側では、鳥取県北栄町の妻波古墓[4]が有名である。方形墳丘を２段階にわたり拡張し、第Ⅰ期は墳丘のみ、第Ⅱ期は墳丘と遺物が出土していない土坑１基、第Ⅲ期は盛土の拡張に五輪塔多数・集石・火葬骨（集団墓）を伴い、時期は16世紀中葉～後半



第15図　初和古墓塚１変遷図（1/200）

で、特定有力者個人墓から同族・構成員の集団墓へ移行すると解釈されている。

妻波古墓は遺物の出土しない方形の土坑、方形の墳丘、石塔を多数伴うなど、初和古墓と類似する点を挙げられる。特にⅡ～Ⅲ期は方形の土坑の上に墳丘を構築し、その後周囲に石塔の設置が行われるので、初和古墓の変遷と通じる点が多い。妻波古墓ほど明確にはできなかったが、塚１でも築造契機となる特定有力者個人墓から同族・構成員の集団墓への変遷があった可能性が考えられる。このことから、塚１も妻波古墓同様の16世紀後半の様相を示すものであろう。　（氏平）

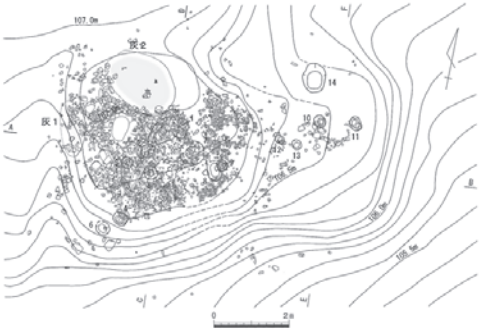
註

（1）中森　祥「東中国の中世墓」『日本の中世墓』高志書院　2009

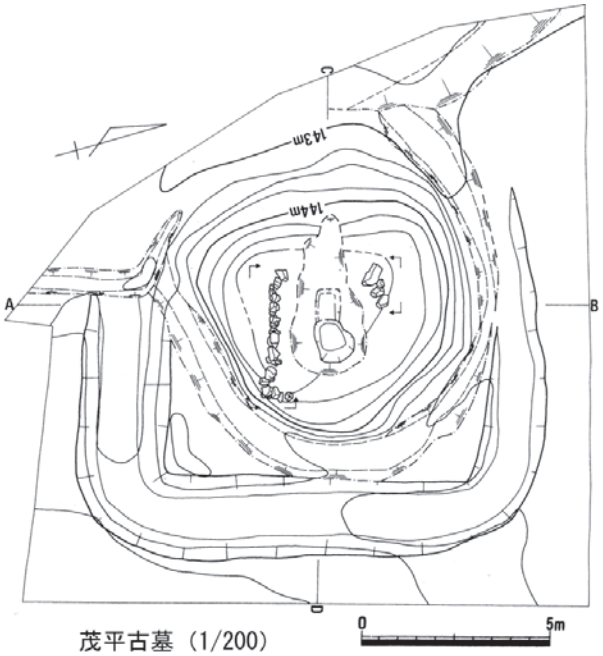
（2）「大河内遺跡　及遺跡　小池谷遺跡　小池谷８号墳　小池谷Ｂ遺跡　上相遺跡　小中遺跡　小中古墳群　鍛冶屋迨遺跡　鍛冶屋迨古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』242　岡山県教育委員会　2016

（3）「西大沢古墳群　畑ノ平古墳群　虫尾遺跡　黒土中世墓　茂平古墓　茂平城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111　岡山県教育委員会　1996

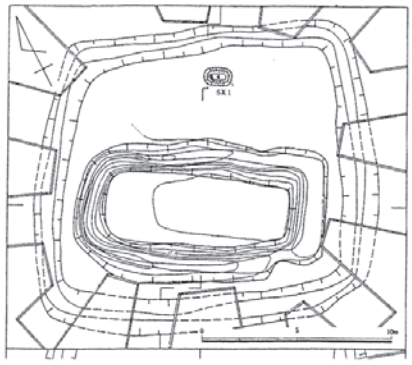
（4）「妻波古墓―発掘調査報告書―」『大栄町文化財調査報告書』第21集　鳥取県大栄町教育委員会　1985



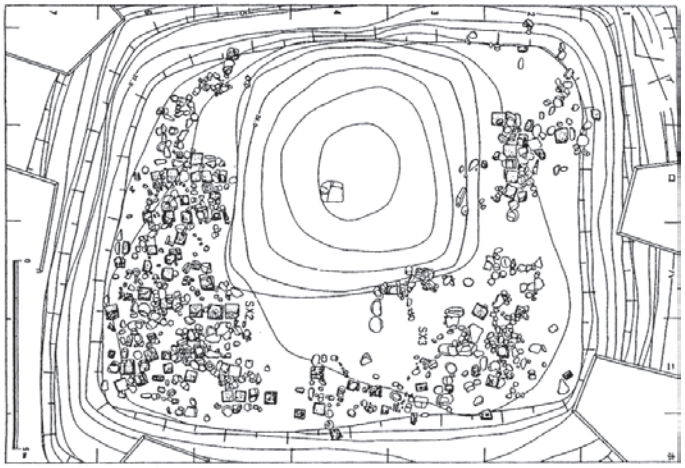
小池谷遺跡　塚（1/200）



茂平古墓（1/200）



妻波古墓Ⅱ期（1/400）



妻波古墓Ⅲ期２段階（1/200）

第16図　東中国の塚墓